

事の起つたのは春のことで御座いました。さうです或晩……もう夜の明けるのも間のない時分……私は眠られなかつたのです。夜ナイチンゲール鶯は何とも云へない好い聲でお庭に歌つてゐます……私は起きてそれを聴きに階段のところまで出ずにゐられませんでした。それは震へを帯びた好い聲で、後から後からと歌ひ續けて参ります……すると不意に誰か私を呼んだ様に思はれました。それはワシヤの聲で如何にも優しく「ルーシヤー」と呼んだ様に思はれました……私は四邊を見廻はしました。そして多分未だ本當に眼が覺めてゐなかつた故で御座いませう、足を踏み外して一番上の段から地面の上へ轉げ落ちました！でも私は大した怪我はないと思つてゐました。直ぐに起きて自分の部屋へ歸つて來ました位ですから。只内部に何か知ら——體の内部に——痛んだ處があつたものと見えます……一寸息を繼がしていただきます……半分許り……濟みませんが。」

ルケリヤは言葉を切つた。私は彼女を見遣つて驚いた。取別け私を驚かしたのは、彼女が殆んど面白さうに溜息も吐かず、呻きもせず、愚痴も溢さず、同情も求めずしてその話を話したといふことである。

『その事があつてからといふもの』とルケリヤは話を續けた。『私は漸々と寢れて瘦せ出しました。皮膚は暗い色になり、歩くのが苦しくなりました。それから——私はすっかり兩脚とも利かない様になりました。立つことも坐ることも出來ず、始終横になつてばかり居なければならなくなりました。食べるものも飲むものも一向に進まず、漸々悪くなつて行く許りでした。貴方のお母さまは御親切にお醫者に看せても下さいましたし、病院へ入れても下さいました。ですけど病院へ行つても治りはしませんでした。それにどの醫者も何んな病氣かさへ判らなかつたので御座います。そりやもういろんなことを仕盡して呉れました——焼饅で脊椎せきついを焼いたり、氷で體中を冷したりしましたが、何の驗けんも御座いません。私は到頭體がすっかり痺れて了ひました……ですからお醫者様方も最う療治をしても無駄だと仰有いますし、不具者かたはものをお邸にお置きになつても仕方が御座いませんので……え、そんな譯で此處へ送られて参りました——此處には縁者が御座いますのでね。さういふ譯で私は御覽の通り此處にかうして居るので御座います。』

ルケリヤは復び口を噤んだ。さうして復び微笑しようとした。

『だがこれは酷い——こんな處へ！』と私は叫んだ……さうして如何に後を繼げるべきかを知らなかつたので私は尋ねた。『それでワシリー・ポリヤコフはどうしたのかい？』これは随分間の抜けた問であつた。

ルケリヤは一寸眼を外らした。

『ボリヤコフが何うしたと仰有るので御座いますか！あの人は悲しがりました——少しは悲しがりました——が、他の女と、グリーンノーエ生れの娘と、結婚しました。グリーンノーエを御存知で御座いますか？ 此處から遠くは御座いません。娘の名はアグラフィナと申すのです。あの人は本當に私を愛して呉れました——でも貴方あの人も若いんですもの。獨身ではゐられませんわ。といつて私が何んな對手になれるものでせう？ あの人の探し出したお嫁さんといふのは、人の好い可愛らしい女です——そして最う子供も御座います。あの人はこの土地に住んで居りまして、近くの人の書記を勤めて居ります。貴方のお母さまは身元の保證をつけてお暇をお遣りになつたものですから、却々よくやつてる様で御座います——有難いことには。』

『ちやお前は、ずつと此處に寝てゐるんだね？』と私は復び尋ねた。

『はい、もう七年程になります。夏はこの小屋に寝て居りますが、寒くなりますと湯殿の方へ移して呉れますので、彼方の方に寝て居ります。』

『誰がついてゐて呉れるんだい？ 氣を付けて呉れる人があるのかい？』

『え、それは何處にだつて親切な人達はありませんもので、此處でも私は見捨てられる様なことは御座いません。それに私はそれ程皆様の御手数をかけないでも済むので御座います。』

食物といつて格別のものを食べませんが、水はこの瓶に這入つて居ります。これは何時でも綺麗な清水で一杯になつて居ります。瓶には自分の手が届きますし、片腕はまだ役に立つんです。此處に孤兒で小さい女の子がゐまして、折々看に來て呉れます。深切な子で御座います。たつた今も此處に居ましたが……お會ひになりませんでしたか？ 本當に可愛らしい美しい子で御座いますよ。その子が花なんぞ持つて來て呉れますの。庭にも花が御座います——御座いますけれども——今は皆な失くなつてしまひました。ですけれど野の花も好いもので御座いますね。庭の花よりか好い匂のするのが御座いますね。あの山百合なんぞ……何より好い匂ちや御座いませんか？』

『それでルケリヤ、お前は退屈だとも、情けないとも思はないのかい？』

『だつてしようがないぢや御座いませんか？ 私は嘘を申し度く御座いません。最初のうちは随分辛う御座いました。ですけれど後には漸々と慣れて來て、ずつと辛抱強くなりました——もう何でも御座いません。他人様にはまだくずつと悪いのがお有りです御座いますからね。』

『それはまた何ういふ事なんだ？』

『でも世間には雨風を凌ぐ屋根のない人もありますし、眼の見えない人や、耳の聞えない人

もありませんのに、私は兎も角もはつきりした眼が開いて居りますし、何でも——何でも聞えるので御座います。土龍が地の中で穴を掘つて居りますと、それさへも私には聞えます。そしてどんな匂でも、極く微かなのでも判ります！ 島の蕎麥や、庭の菩提樹に花が咲けば——私はそれを聞きませんが、真先に判るので御座います。兎に角風が一寸でもそちらの方から吹いて参りますればね。はい、神様の思召に背く人は私なんぞよりもずつと悪いので御座います、此處のところで御座いますよ、達者な方はどなたでも罪に墮ち易いので御座いますが。私はもう罪といふ事にさへ縁がなくなつて居ります。先達つて坊さまのアレクシイ様が聖餐式を授けにお出で下さいまして、その節仰有いますのには「お前さんは懺悔をするにも及ぶまい。かうしてゐちや罪を犯す譯にも行かないからな！」つてね。ですけれど、私は申しまぶした。「心の中で犯す罪はどうしたもので御座いませう！」するとあの方も「さうさな。大した罪ではなからうよ」と仰有つてお笑ひになりました。

『ですけれど私はさうした心の中でも大した罪を犯してゐない様に思ひます。』とルケリヤは語り續けた。『何故と申して、私は物を考へない様に、別して想ひ出さない様にと稽古をして参りましたから。ですから時間は一層早く経つので御座いますよ。』

私は有體に云ふと驚いて了つた。『ルケリヤ、お前は始終獨りつ切りでゐるのに、どうして

考へ事をしない様に出来るんだ？ それとも始終睡ねて許りゐるのかい？』

『いゝえ貴方！、始終睡ねて許りはゐられません。格別酷ひどい痛みといふのでもありませんが、それでも右の方の内側うしろに、それから骨にも痛みがありました思ふ様には睡れないので御座います。はい……けれどもまあ、一人で横になつてかうして横になつて居るので御座います。かうして横になつてゐて何も考へ事をいたしません。私は只生きてゐて息をしてゐることを感じます許りで、その事に丈け氣をとられてゐるので御座います。私は眼を開けて見たり、耳を澄して聴いたりいたします。蜜蜂は巢の中でブン／＼と飛び廻つたり、唸つたりして居ります。鳩は屋根の上に下りてクウ／＼と鳴きます。牝鶏は雛鳥ひよこを連れてパン屑などをつゝきにやつて参ります。それから雀が飛んだり、蝶が飛んだり——私にとつて却々の饗應もてなしになるので御座います。昨年は燕があつた隅すみつこに巢を上までかけましてね、雛鳥を幾羽かかへしました。それはそれはどんなに面白かつたでせう！ 一羽が巢へ飛び歸つてすり寄つて雛に餌をやつては又飛んで行つてしまひます。それから又見ると他のがもう入れ代つて居ります。どうかすると巢へ飛び込まないで、戸口を通り過ぎて了ふことが御座います。すると小さいのが直ぐに口を開けてチイ／＼と鳴き始めます……私は翌年も亦來て呉れるようにと願つて居りましたが、聞けば或獵師が鐵砲で撃つて了つたさうで御座います。一體あんなものを

獲つて何になるんでせうね？ 燕なんぞ甲蟲より餘り大きくない位なのですもの……一體貴方獵をなさる方々は何といふ酷い方々でせう！」

「私は燕なんぞ撃たないよ。」と私は急いで云つた。

『でも一度。』とルケリヤは復た始めた。『本當に可笑しいことが御座いましたよ。兎が一匹飛び込みましてね、本當に兎が！ 大方獵犬にでも追はれてゐたんでせう。兎に角戸口へ轉り込んだ様に思はれましたの！ 私の直ぐ傍に踏躑つて、随分長いこと居ました。始終鼻をくんくんいはせたり、髭をびくくさせたりしましてね——まるでお役人様か何ぞの様に！ そして私の方を見るので御座います。屹度私が怖いものでないといふ事が解つたので御座いませう。到頭立上つてびよこくと戸口へ出て外を見廻しました。その時の容子を何と云つたら宜いでせう？ 本當に可笑しな兎で御座いましたよ！』

ルケリヤは『可笑しくは御座いせんか？』とでも云つた様に私を見た。彼女を満足さす爲めに私は笑つた。彼女は渴いた唇を濡らした。

『それで冬になりますと、どうしても餘計に悪くなるので御座います。暗いものですからね。蠟燭を點すのも惨めですし、點けたつて何の役に立ちませう？ 成る程物は讀めませう。そして私は元來讀むことが好きでした。けれども私が何を讀みませう？ 讀むものとしては一冊

も御座いせん。假令ありましてもどうしてそれが手に持てませう？ 坊さまのアレクシイ様が慰みになるだらうといつて、曆を持つて來て下さいましたけれど、役に立たないとお考へになつて、又お持歸りになつて了ひました。併し暗いには暗いんですけれど、耳を澄まして聽けば何時でも何か聞えます。蟋蟀が啼いたり、鼠がどつかを掻き破り出したりしましてね。こんな時でございますよ。何にも考へない方が宜いと申すのは！』

『それから私はお祈も續けていたします』とルケリヤは一寸息を繼いだ後で話を續けた。『只私は餘り澤山——お祈を存じませんが。それに何だつて神様に御面倒をかけることがございませう？ 私が今更ら何の願をいたしませう？ 神様は私に無くてならないものを私よりも能く御承知でいらつしやいます。神様は私に十字架をお授けになりました。それは私を愛して下さるからでございます。ですから私共は覺らなければなりません。私は「死の祈り」や、「マリヤ様への讚美」や、「凡ての惱める者の願ひ」を繰返して復た靜かに横になりませう——何にも考へないで。そして私は何事もなく日を送つてゐるのでございます！』

二分間が経過した。私はその沈黙を破らず、私の腰掛になつてゐる狭い桶の上に身動きもせずゐた。私の前にた横はつてゐるこの生きた、むざんな生物のむごたらしき石の様な靜寂は私へもつたはつた。私も何だか痺れた様になつて來た。

『ねえルケリヤ』と私は遂に口を切つた。『私はかう思ふんだがね。お前を病院へ、街の好い病院へ入れさせようと思ふんだが何うだらう？ 何が判るものか——まだく治るかも解らないよ。兎に角一人ぼつちにして置く譯にはゆかない……』

ルケリヤの眉毛は微かに動いた。『いゝえどうか』と彼女は迷惑さうに小聲で答へた。『病院なんぞへ遣らないで下さいまし、私にかまつて下さいますな。そんな處へ遣られますと反つて苦痛を増す許りですから！ もうかうなつては何うして治されるものでせう？……何時かも或お医者様が見えまして、私を診察したいと仰有いました。私はどうぞお願ですからその儘にして置いて下さいとお願しました。けれどもお取上げにならないで、私をひねくり廻して、手足を叩いたり、引張りまはしたりして、そして仰有いますには、「私は學問の爲めにかういふことをするんだ。私は學問の下僕即ち學者なんだ！ だからお前は決して不服を云つてはいけない。私は色々の功勞で賞牌を貰つてゐる。そしてお前達の様な國民の爲めに骨折をしてゐるんだからな」つてね。お医者様はそこいら中をこつくと叩いて見て、私の病名を仰有いました——何でも大變に長つたらしい病名でございましたがね——そして其儘行つてお了ひになりました。それから後一週間許りといふもの骨が痛んで仕方がございませんでしたよ。貴方は「全くひとりつきりで何時もひとりつきりで」と仰いますけれど、何時もさう

ではございません。村の人達は見に来て呉れます——私はおとなしくしてゐて——別段厄介をかけませんですからね。娘達はやつて来てお喋りをして呉れますし、巡禮の女が迷ひ込んでエルサレムの話や、キエフの話や、神聖な町々の話なんぞをして聞かせます。それに私は獨りつきりでゐても怖くはございません。實はその方が宜い位で——え、さうなのです！——ですから旦那様、私に構つて下さいますな、病院なんぞへ連れて行つて下さいますな……御深切は本當に有難うございますけれど、只どうぞ私に構つて下さいますな、どうぞ！

『いや、そりやお前の好きな様にするがいゝ、好きな様に、な、ルケリヤ。私も只お前の爲を思つて云つて見た丈けなだからね。』

『よく判つて居ります旦那様、私の爲を思つて仰有つて下さることは。ですけれど旦那様、私を助けるなんていふことが出来るものでございませうか？ 誰が他の人の心の奥底まで立入ることが出来ませう？ 人は誰でも自分で自分の始末をしなければなりません！ 貴方は屹度私の申上げのことを本當になさらないでせうが。私も折々は随分淋しく寝てゐることがございます……そして世界中に私より外に誰もゐない様に思ひます。只私一人丈けが生きてゐる様に！——そして何だか誰か私を祝福してゐて呉れる様に思はれます……私は本當に不思議な夢に持つて行かれて了ふのでございませう！』

『それでどんな夢を見るんだ、ルケリヤ？』  
 『それがまた旦那様何とも云へないのでございます、説明が出来ないのでございます。それ以後では忘れて了ひますしね。何でも雲の様なもの下りて来てばつと擴がるかと思ふと、まことにさつぱりと好い氣持になるんですが、それが何だかといふことになる一向に解りません！ 只人が傍に居りますとそんなものは些とも見えませんで、私の不仕合せといふことより外に何にも感じないのでございます。』

ルケリヤは苦しい太息を洩らした。彼女の呼吸もその手足と同様に自分の思ふ儘にならなかつたのである。

『旦那様は大層私のことを心配して下さる様にお見受け申しますが』と彼女は復び始めた。  
 『どうぞ餘り御心配下らないようお願い致します！ 御安心を頂くために一例を舉げてお話し致しますが、私はどうかしますと今でも……覚えていらつしやいますか、私が若い時分に何時もどんなに氣輕な女でございましたかを！ 本當にあれば者でございました！……で、如何でせう？ 私は今でも歌をうたふのでございますよ。』

『歌を歌ふ？……お前が？』

『え、昔の歌や合唱の歌や宴會の歌やクリスマススの歌や、いろんなのを歌ふのでございま

すよ！ 私はそんなのを澤山存じて居りまして、矢張り忘れないのでございます。只舞踏の歌だけは歌ひません。この體になつて了つては向きませんですから。』

『どんな風に歌ふのかい？ 自分で自分の氣晴らしにかい？』

『え、自分の氣晴らしでございます。それでも聲を揚げて歌ひます。大きな聲は出ませんけれど人に解る位には歌ひます。一人の小さい女の子が私の介抱をして呉れると申しましたが、それは利發な孤兒なのでございます。私はあの子に教へました。あの子はもう四つ許り歌を教へりました。貴方は本當になさいませんでせうか？ 一寸お待ち下さいまし、直ぐにやつてお目にかかせよう……』

ルケリヤは息を繼いだ……この半ば死んだ人間が歌ひ出さうとしてゐるのだといふ考が、私の心に自からなる恐怖の感情を起させた。併し私がまだ一言葉をも出さない前に、長く引き伸ばされた、やつと聞える程の、けれども清らかに澄切つた調子が、私の耳に響いて來た……それは第二第三の調子に續かれた。『牧場にて』といふのをルケリヤは歌つた。彼女は歌つた——その石の様な顔の表情は少しも變らず、其眼さへも一點に釘附けにされた儘で。併し乍らあの煙の糸の様に揺れた頼りなく細い聲が、どんなにか人の心を動かす様に鳴り出たであらう！ 彼女が何んなにかそのうちへ凡ての魂を注ぎ込もうと願つたであらう！……

私は今や何等の恐れをも感じなかつた。私の胸は云ふに云はれない憐憫の情をもつて動悸を打つた。

『あゝ、もう駄目です！』とルケリヤは不意に云つた。『もう力がございません。お目にかゝつた嬉しさに気が顛倒して了つたのでせう。』

彼女はその眼を閉ぢた。

私はその小さな冷たい指の上に私の手を置いた……彼女は私をちらりと見たが、その金色の睫に縁取られた暗い眼瞼は再び閉ぢて、古い彫像か何ぞの様に靜かになつてゐる。暫くすると二つの眼が薄暗がりの中で閃いた……それは涙に濡れて來たのである。

私は前の通りぢつとしてゐた。

『私は何て馬鹿なのでございませう！』と不意にルケリヤは思ひ掛けなき力を以て云つた。そして眼を巨しく見開いた。彼女は瞬きをして涙を拂はうとした。『お恥しうございませう！ まあどうしたことでございませう？ こんなことつて随分永らくなかつたことでございませうに……昨年の春ワシーヤ・ポリヤコフが來て呉れましたあの日以来なかつた事でございませうに。あの人が傍に掛けてゐて話をしてゐた間は何ともございませうでしたが、行つて了はれると私は寂しさにどんなに泣きましたらう！ 私は何うして涙なんぞ流したでせう？』

でも一體に私共女は何でもないことに涙を流すものでございませうのね。旦那様』とルケリヤは付け加へた。『貴方はハンケチを持つていらつしやいませう……お厭やでございませうければ一寸お拭き下さいませう。』

私は急いで彼女の望み通りにしてやつた。さうしてそのハンケチをルケリヤに遺して置いた。彼女は初めのうちそれを辞退した……『こんなものを頂きましても私に何の役に立ちませう？』と彼女は云つた。そのハンケチは可成りお粗末な物であつたけれど、綺麗で眞白であつた。後で彼女は弱々しい指にそれを擱んで再び放さうとしなかつた。私は我々二人のゐるその暗がり慣れて來たので、彼女の容貌をはつきりと見別けることが出來た。その顔の赤銅色の下に覗いたデリケートな赤らみをすら認めることが出來た。黦くとも自分に見えたところでは、その顔の中に昔の美しさの名残をも見出すことが出來た。

『旦那様、貴方は睡れるかとお尋ねになりましたね』とルケリヤは再び始めた。『睡るのは極く僅かでございますけれども、寢附く度に私は夢を見ます——それは素晴らしい夢を！ 夢の中では病氣でございませぬ。私は何時も達者で若うございませう……たつた一つ悲しい事には眼が醒めて樂々と伸びをしたいと思ふとき、私は全で鎖につながれてゐる様なのでございます。一度なんぞ、それは大變な夢を見たのでございませうよ！ それをお話し申しませう』

か？ ぢやお聞き下さいまし。私は牧場に立つて居ましたが、周囲はすつかり背の高い金の様に實つたライ麦なのです！……私は赤い犬を一匹連れて居りました——それは黒い犬の悪い犬で始終私に噛みつかう噛み附かうとしてゐるのでございます。ところで私は鎌を一挺手に持つてゐました。只の鎌ではありません。それはあのお月様御自身——鎌の形をしたあのお月様の様でした。そしてそのお月様で以て私はライ麦を刈つて了はなければなりません。只私は暑苦しさで酷く疲れて参りましたし、お月様は私の眼を眩ましさうでもありませんし、何だかぐつたりした様に感じて居りました。そして矢車菊はその邊一面に延びてゐて、それが又随分大きいのでございますよ！ それはどれも皆、その頭を私の方に向けて居ります。私は夢の中でそれを摘み取らうと思ひました。ワーシヤが来る約束をしてゐましたから、先づ花環を拵へようと思つたのです。花環を編む位の時間はあるのだらうと思つたのでございます。で、私は摘み始めたのでございますが、摘んでも指の間から溢れて了つて、仕様がございません。ですから私は花環を拵へることが出来なかつたのでございます。さうしてゐるうちに誰か私のすつと傍迄来て、「ルーシヤー！ ルーシヤー！」と呼ぶのでございます……「あゝ、間に合はなかつた、残念なことだ！」と私は思ひました。でも仕方がないといふ考から私は矢車菊の代りにあのお月様を頭の上へ載せました。私は冠の様にそれを被りま

すと、直様全身が光り出し、四邊一面を明るくしました。すると何うでせう！ 穂並の先を渡つて足早に私の方へ近づいて来るのは、ワーシヤでなくて基督様御自身でございます！ どうして基督様だと知れたのかそれは解りません。畫ではあんな具合に描いてはないのですが——只それは基督様でした！ 髯がなくつて、脊が高くつて、年が若くつて、一體に白づくめでその帯ばかりが金色でございました。そしてお手を私の方へお差出しになつて仰有いますには、「恐るゝなかれ。我が飾られたる花嫁よ、我に従へ。曹は天國の合唱舞踏を指揮し、また極樂界の歌を歌ふべし」つてね。そして私がどんなにそのお手に縋りついたでせう！ 犬は直ぐ私の踵について参りました……が、そのうちに私共は上の方へ浮び出しました！ 神様がお先で……その鷗の様に長い翼を空一杯にお擴げになつて——そして私がお後について！ 私の犬は後に残つてゐなければならぬのでございました。その時初めて私は解りました——あの犬が私の病氣だつたといふこと、それから天國では病氣の居る場所がないといふことを。』

ルケリヤは一寸息を繼いだ。

『それからも一つ見たのでございます』と彼女は復び始めた。『尤もそれは幻だつたかも知れませんが。全く私には判りません。私は現在の此小屋に寝てゐた様に思ひました。すると亡く



なつた兩親が、父と母とが参りまして丁寧に御辭儀をいたしました。が、何にも云はないのでございます。で私が「お父さん、お母さん、一體どうして貴方は私にお辭儀をなさいますか？」つて尋ねました。すると二人の申しますには、「何故と云つて、お前は世で大層な苦しみをして呉れた。その爲にお前には自分の魂を救つた計りでなく、私達の重荷をさへ取去つて呉れた。だからあの世へ行つてゐる私達も大變に氣樂だ。お前は最う自分の罪は失くして了つて、今では私達の罪を消してゐて呉れるのだ」つてね。さてかう云つて私の兩親はもう一遍私にお辭儀をしたかと思ふと、二人の姿は見えなくなりました。壁より外に何にも残つて居りませんでした。私は後でこの事が大層心に掛りまして、懺悔の折、牧師様にもお話しいたしました。でも牧師様はそれは幻ではあるまい、幻は坊さん達に許り現れるものだからといふ御意見でございました。』

『もう一つお話いたしましたませう』とルケリヤは話しつゞけた。『夢に私は往來の柳の木の下に坐つて居りました。杖をもつて合財袋がっさいぶくろを肩にかけて手拭で鉢巻をしまして、丁度巡禮の女のようにしてね！そして私は何處か遠い／＼所へ巡禮して行かなければならぬのでございました。巡禮は引つ切りなしに私の傍を通り過ぎます。とぼ／＼とやつて来て、皆同じ方へ行つて了ひます。皆如何にも疲れたらしい顔色で、どれもこれも能く似寄つて居ります。さ

て私はその人達の間をうろ／＼としてゐる一人の女を夢に見ました。他の人より頭丈け位脊が高く、妙な衣服を着て居りまして、私共と異ちがひます——露西亞風ではございません。顔も妙な顔で——寢れたしかし儼しい顔でございました。そして他の人達は皆その婦人を離れて行きます。ところがこの女は急に振返つて、つか／＼と私の方へ参ります。眠ちつと立止つて私を見詰めます。その眼は黄色で巨きくて澄んでゐて、鷹たかの様なのでございます。私は、「何誰どなたですか？」と尋ねました。するとその人は、「私はお前さんの死神なの」と申します。併し私はちつとも驚きはいたしません。反つてこの上もなく嬉しうございました。私は自分で十字を切りました！するとその私の死神だといふ女は、「氣の毒だがねルケリヤ、まだお前さんを連れて行つて上げられないんだよ。さよなら！」と申します。私はまあどんなに悲しうございましたらう！……「連れてつて下さいなねえ、小母さん、連れてつて下さいな！」と私は申しました。すると私の死神は私の方へ振向いて、話をしました……私の死ときに時ときを知らして呉れるのだとは解りましたが、はつきりしない、譯の判らない言葉なのでした。「聖彼得祭セントペテロ祭が済んでから」と申しました……それを聞いて私は眼が覺めました……はい、こんな不思議な夢を見たのでございます。』

ルケリヤは眼を上の方へ向けて……深い物思ひに沈んだ……

『只悲しいことには、折々一週間位ちつとも眠れないで通す様なことがございますの。昨年或奥様がお見えになりました、催眠薬を一壘下さいました。そして一回四十滴宛飲む様にと仰有いました。それは大層験がございまして、よく眠れたものでございしますが、残念なことにはその壘ももう迅くにお終ひになつて了ひました。貴方は御存じでいらつしやいませうか—あれは何といふ薬でございませう？ どうしたら求められるものでございませう？』

その婦人はルケリヤに阿片劑を與へたものに違ひない。私はそれと同じ壘をもう一本彼女に與へることを約束した。さうして彼女の忍耐力に對して復び又驚嘆の聲を揚げないでゐられなかつた。

『まあ、旦那様！』と彼女は答へた。『何うしてそんなことを仰有います？ 忍耐力など何のことでございませう？ あのそら、柱行者のシメオンでございませうね、あのこそ本當に忍耐力が、大きな忍耐力がございました。三十年の間といふもの、柱の上に立通したといふ事でございませうものね！ それからもう一人の聖徒は胸の所迄生理になり、蟻にその顔を食べさせました……それから或學者から聞いた話でございませうが、或時或國へイシュマエル人といふのが戦争をしかけて参りました。そしてその國の人達残らずを苦しめたり、殺したり、思ふが儘な振舞をしました。何うすることも出来ませんでした。するとその時その國へ一人

の清淨な處女が出て参りました。大きな劍をさげ、八磅もある重たい甲冑をつけて、敵のイシュマエル人に向つて出陣しました。そして海の外へ追ひ拂つてしまつたと申します。ですが敵を追つ拂つてしまつた時、その女は敵に向つて申しますには、「今は私を炮烙刑にして下さい。私の國の爲めに炮烙刑にされて死ぬといふのが私の誓であつたのだから」つてね。そこでイシュマエル人はその女を捕へて焼き殺しました。そしてその國の人達は、その時以來自由になつたさうでございませう！ こんなこそ本當に貴い行ひでございませう！ それなのに私なんぞ如何でございませう！』

私は何に依つて又何んな形でジャンヌ・ダルクの傳説が彼女の耳に届いたかを不思議に思つた。そして暫く黙つてゐた後、その處女が幾つ位であつたかをルケリヤに尋ねて見た。

『二十八……か九……三十にはなりますまい。でもどうして年なんぞお聞きになります！』

私はまだ他にお話することがございます……』

ルケリヤは不意に息の詰つたやうな咳をして、唸つた……

『お前餘りいろんな話をするから』と私は云つた。『それでいけないんだらう。』

『さうでございませう』と彼女はやつと聞える様な小聲で云つた。『もうお話を止めにするのが宜しいかも知れませぬ。けども構うもんですか！ 今に貴方が行つてお了ひになれば、私は

何時迄でも存分に黙つてゐられるんですもの。兎に角胸がさつぱりして参りました……』  
私は暇乞ひをしかけた。私は薬を送る約束を繰返した。それでも一度よく考へて見て何か  
欲しいものがあつたらばさう云ふが宜いと云ひ聞かせた。

『何にも欲しいものはございません。私はこれでもう澤山でございます！』と彼女は甚く大  
儀さうに併し感情の充實した聲で云つた。『どうぞ皆様御健全にね！ ですが旦那様、貴方の  
お母さまへ一言お傳へ下さいまし——この邊の百姓は貧乏でございます——若し借地料を  
幾らかでも減らしてやつて頂きましたら！ 百姓共は土地も少ないし、利もございません……  
さうして下すつたら皆どんなに有難がることとせう…… ですけど私は何にも欲しいも  
のはいりません。私は全くこれで満足して居りますから。』

私はルケリヤの願をかなへてやらうといふ約束を彼女にした。さうして既に戸口迄歩み寄  
つてゐた……彼女は復び私を呼び返した。

『覚えていらつしやいますか旦那様』と彼女は云つた。彼女の眼の中に、唇の上には何か不  
思議な輝が見えた。『私の髪は何時とどんな髪でございましたらう？ 膝まで届く様なのを  
覚えていらつしやいませう！ それを思切つて切つて了つたのも、ずつと以前の事でございますま  
す……あんな髪を！ ですけど、どうして梳いたりなんぞ出来ませう？ こんな體になつ

て了つては……ですから私は切つて了つたのでございます……はい……ではさよなら旦那  
様！ もうお話が出来ません。』……

その日獵に出掛ける前に私は村の警官とルケリヤに就て話をした。私は彼からルケリヤが  
村で「生きた遺骨」と云はれてゐることを聞いた。又あんなになり乍らちつとも厄介をかけたな  
いといふこと、ちつとも愚痴や不平などを洩らさないといふことを聞いた。『何にもして呉  
れとは申しませんが、何をしても喜びます。世に稀な心掛の好い女とでも云ふのでせ  
う。神様から』と警部は言葉を結んだ。『その罪を罰しられたんだと思ふ人もありません。が、  
私共はさうは思ひません。あの女に罪があるかないかは、まあ——まあそんな裁判はしま  
さい。あの儘にして置くこととございます。』

數週の後、私はルケリヤが死んだといふことを聞いた。即ち彼女の死神は彼女へ……そし  
て「聖彼得祭が濟んでから」やつて來たのである。聞けばその日彼女は鐘の音を聴き續けてゐ  
たといふことだ——アレクシエフカから教會迄は五哩以上もある上にそれは日曜日でも何で  
もなかつたのだが。併しルケリヤは鐘の音が教會から聞えるのでなく、上から聞えるといつ  
たさうだ！ 恐らく彼女も敢て天からとは云はなかつたのであらう。

## 車輪の音

『一寸申し上げますが』とイェルモライは私に逢ふべく小屋へ這入つて來乍ら云つた。私は丁度食事を済ましたところで、可成りの成功は收めたけれど、終日松鷄を撃ち廻つて疲れたので、一寸休息しようと思つて旅行用の寢臺の上に横たはつてゐた——それは六月十日頃のことと、甚い暑さであつた……『一寸申し上げますが、彈丸はみんなになりました。』

私は寢臺から跳ね起きた。

『みんなになつた？何うして？村から三十磅許りも——袋一杯持つて來たんぢやないか！』  
『それはさうです。大きな袋でございました。二週間分位はたつぷりありました。だが何ういふものでせう！穴でも穿いてゐましたかな。兎に角彈丸はありません……精々十發位も残つて居ませうかな。』

『ぢや何うしたもんだらう？飛切上等の場所を控へてゐるんだが——明日は六群位當にしてゐたのに……』

『ぢや、ツウラへやつて下さいまし。こゝからさう遠くもありません。四十哩ばかりでせう、

行つて來いと仰有りや風のように飛んでつて、四十磅位持つて參りませう。』

『ところで、何時行かうといふんだ？』

『何時つて直ぐに。延ばせるものですか？只一つ馬を雇はなくちやなりません。』

『何だつて馬を雇ふ？こつちの馬ぢや何うしていけない？』

『こつちの馬ぢや、とても彼處へ行かれませぬ。軸馬は跛を引いてゐますからな……酷く！』

『何時からそんなになつた？』

『それは此間馭者が蹄鐵を打ちに連れて行きましたね、それで蹄鐵を打つたのですが、不器用な鍛冶屋だつたんでせう。今ぢや全で脚が踏めないんです。そいつが前脚ですが、犬かなんぞの様に持上げて居りますで……』

『さうか？ぢや蹄鐵丈は取つて遣つたらうな？』

『いゝえ、取つてやりません。が、何うしても取つてやらなくちやなりません。釘が肉の中へ打込まれたものと見えますね。』

私は馭者を呼ぶようにと云ひ附けた。イェルモライが本當を云つたことを知つた。軸馬は實際蹄を地につけることが出来なかつたのである。私は早速蹄鐵を取つて、濕つた粘土の上に

立たせて置くようにと云ひ附けた。

『それで旦那は馬を雇つて、ツウラへ行かさうとなさいませうか？』とイェルモライは執拗く尋ねた。

『こんな野つ原の中で馬が雇へると思ふか？』と私は思はずいらくとして来て怒鳴り附けた。

我々のわた村は荒れ果てた神様にも見捨てられた様な場處であつた。凡ての住民は貧乏に攻められてゐる様に思はれた。我々はやつとの思ひで、可成り廣い一軒の小屋を見出した。それすらも一つの煙突をも有つてゐなかつた。

『はい』とイェルモライは何時もの通り平然として答へた。『そりや旦那の仰有る通りぢやありませんが、この村に或百姓が居りました——誠に惻巧な奴で、金持でもありました！馬も九頭許り居りました。それが失くなつて只今では總領息子が後を一切やつて居ります。この息子といふのは全つきりの馬鹿ですが、それでもまだ親爺の拵へた財産を使ひ切つても了ひません。あいつに頼んだら馬が出来ませう。何ならあいつを連れて参りませう。あいつの兄弟といふのは皆抜目のない奴等許りださうですが……でも兄は頭なんですからな。』

『何うして？』

『何うしてと云つて——あいつが總領ですからな！何うしても若い奴等は云ふ事を聞かぬきやなりませんよ！』それからイェルモライは弟なるものゝ地位に關して筆も及び難い様な豪い氣焰を吐いた。

『あいつを伴つて参りませう。あいつはお人好しですから、大丈夫話が纏りませうよ。』

イェルモライが彼の所謂『お人好し』を伴れに行つた間に、私自身、ツウラへ出掛けて行つた方が私にとつて宜くはないかといふ考を私は起した。第一に經驗から教へられて、私はイェルモライに餘り大なる信用を置いてゐなかつた。或時私は町へ買物に彼を遣つた。彼は一日の中にすっかり私の用向を済まして來ようと約束して行つたが、全一週間も歸らないで、金を残らず飲んで了ひ、行きには馬車で行つたものが、歸りには徒歩で來たのである。第二に私はツウラに一人の知合を有つてゐる。それが馬喰である。私はその男から馬を一頭買つて役に立たなくなつた軸馬に換へようと思つたのである。

『それに極めた！』と私は考へた。『自分で行つて來よう。途中でも寝られるし——仕合せとこの馬車は居心地が宜いから。』

『連れて参りました！』とイェルモライは十五分許り經つて後小屋へ駈込み乍ら叫んだ。彼の後には一人の脊の高い百姓が跟いて來た。白いシャツに青いズボン、木の皮の靴を穿いてゐ

る。白い眉毛、近眼、くさび形の赤髯、長い脹れた鼻、開いた口——彼は成程『お人好し』に見えた。

『ねえ旦那』とイェルモライが云つた『この男も馬を持つて居ります——そして悦んで居ります。』

『左様でございます、はい、私は……』と百姓は大分噎れた様な聲でもじくし乍ら云ひ出した——薄い髪の毛を振り乍ら、手に持つてゐた帽子のリボンを指で叩き乍ら……『はい、私は……』

『お前の名は何といふ？』と私は尋ねた。

百姓は下を見て昵と考へ込んでゐる様に見えた。『私の名前でございますか？』

『うん、何といふ名前だ？』

『私の名前と云つて——フィロフィーで通ります。』

『さうか。ぢやフィロフィー、お前は馬を有つてるさうだが、三頭のを一組持つて来て呉れまいか——私の馬車へつけるんだがね——何かに馬車は軽いんだ——そしてお前がツウラまで私を載せてつて呉れまいか。この頃夜は月があるし、馬車は軽いし、乗つてけば涼しくもあるからな。だがこの邊の道はどんな具合かな？』

『道でございますか？ 道はちつとも悪いことにはございません。本道迄十六哩か——それより餘計はございません……一個處一寸……ほんの一寸許り厄介な處がありますが、他はちつとも悪いことにはございません。』

『一寸許り厄介な處といつて、何んな？』

『左様でございます、かちわたりで川を越さなければなりませんのでな。』

『だが旦那は御自分でツウラへいらつしやるお考ですか？』とイェルモライが尋ねた。

『さうよ。』

『へえい！』と私の忠實な下僕は頭を振り乍ら云つた。『へえい！』と彼は繰返した。それから彼は床に唾を吐いて部屋を出て行つた。

ツウラ行きは最早彼にとつて何等の興味なきものになつて了つた様である。否それは懶い下らない仕事になつて了つたのである。

『お前は道をよく知つてるかい？』と私はフィロフィーに向つて話しかけた。

『はい、存じてをります！ だが、その、どうも……急ぎましてはどうもその……』

察するところイェルモライはフィロフィーを雇ふに當り、馬鹿の事であるから金は出すと丈け云つて……その上何にも云はなかつたものゝ様である。ところで如何に馬鹿であるとはい

へ——イェルモライの言葉を借りて云へば——フィロフェーはそれだけでは満足しなかつた。彼は五十留を私に請求した——法外な値段である。私は、すつと低く、十留出さうと云つた。我々は値切りあひをしだした。フィロフェーは始めのうちなか／＼頑強であつた。そのうち彼は漸次とではあるが、下げ出した。イェルモライは一寸這入つて来て私に口添をしはじめた。『あの馬鹿は——』『馬鹿といふ言葉が大分好きらしい！』とフィロフェーが低い聲で云つた。——あの馬鹿は全つきり錢勘定が出来ませんよ。』この言葉を聞いて私は思ひ出したことがある——二十年許り前に私の母が二つの往來の行逢つた所に、旅館を一軒建てた。ところで、その番頭にして置かれた年寄の家。奴が、全つきり錢勘定を知らないで、貨幣の數によつてのみ金額の多少を定めた——實際何時も恐ろしい權幕で怒鳴り附け乍らも、銅貨に對して銀貨を出したのである。

『やい、このフィロフェー！ 貴様は本當にフィロフェーだな！』とイェルモライは調戲たが——忌ま／＼しさうにびつしやり戸を閉めて出て行つた。

フィロフェーは何の答もしなかつた——フィロフェーと呼ばれるのは、事實上餘り氣の利いたことではない、が、これより氣のきいた名前を命名式の時につけなかつた村の坊さんに實際の答があるとは云へ、こんな名前をつけられてゐる以上、馬鹿にされたつて仕方がないとあ

きらめてでもゐるやうに。

それでも我々は到頭二十留といふ額で話を纏めた。フィロフェーは馬を連れに歸つて行つた。そして一時間後に私に選りどりをさすべく五頭の馬を連れて來た。馬は却々良い馬であつた——その鬣や尻尾はもつれて居り、其腹は圓々と太鼓の様に張つてゐただけけれど。

フィロフェーと共に二人の弟も遣つて來たが、ちつとも彼に似てゐない。小さい黒い眼の、鼻の尖つた奴共で、成程『敏つこい奴』といふ印象を與へる。彼等は随分早口に色々の話をした——イェルモライに云はせれば『喋り散らした！——けれども兄の云ふ事は聞いてゐた。』

彼等は小屋から馬車を引き出して、一時間半許りは馬車と馬との支度に忙しかつた。まづ彼等は、引繩を解いて、復びしつかりと締め直した！ 弟一人は『栗毛』を軸につけようと頻りに云ひ張つた。何故ならば『あいつなら下り坂がうまく行く』からといふのであつた。けれどもフィロフェーは『むく毛』の方に極めてしまつた。そこでむく毛が軸につけられた。

彼等は馬車に乾草を積み込み、跛になつた軸馬から外したカラーを腰掛の下に置いた。事に依るとツウラで買ひ入れる馬に附けなければならなくなるかも知れないからである……家へ驅けて行つたフィロフェーは、長い白いだぶ／＼の古ぼけた外套を著て、高い棒砂糖形の帽子を冠つて、タールを塗つた長靴を履いて、引歸して來た。そして勝誇つた様に馭者臺へ

上つた。私は時計を見ながら腰を掛けた。それは十時を十五分過ぎてゐた。イェルモライは私に行つていらつしやいとも云はなかつた——彼はヴァレットカを打ち据ゑることに掛つてゐた——フィロフィーは手綱を引絞つて、細い細い聲で叫んだ。『ほーら！ こいつら！』

彼の弟等は兩側へ飛び退いて、脇馬の腹を鞭つた。そして馬車はガラ／＼と門から通へ出た。むく毛は自分の家の方へ向はうとしたが、フィロフィーは二つ三つ鞭を喰らはせて性根をつけた。するとどうだらう！ 我々は既に村を出離れて、茂つたはしばみの林の間を可成り平らな道に沿うて駆けさせてゐたのである。

それは静かな牙え渡つた馬車を驅るのに最も都合の好い夜であつた。そよ風は折々藪の中の其處此處にさら／＼と鳴つて、小枝をゆすぶつて、復び消え去る。空にはぢつとした銀の様な雲が見える。月は高く上つて、皎々たる光をぐるりに投げてゐる。私は乾草の上に身を伸ばして、うと／＼とやり出してゐた……が、ふと『厄介な場處』を思ひ出して飛び上つた。

『おい、フィロフィー、淺瀬へはまだ餘程あるかい？』

『淺瀬へでございませうか？ 七哩位はありませうな。』

『七哩！』と私は考へ込んだ。『ぢや、もう一時間では六ヶしいな。するとその間に一寝入り

出来る。フィロフィー、お前は道をよく知つてゐたらうね？』と私は復び尋ねた。

『はい／＼。何うして知らないことがありませう？ こつちへ來るのは初めてぢやございませんからな。』

彼はその上をまだ何か云つたが、私は耳を傾けなくなつた……私は眠て了つたのである。

よくあることであるが、私はきつちり一時間で起きようといふ自分自身の意志に依つて、なく、一種妙な微か乍らビチャリ／＼ゴウ／＼といふ音を私の耳許に聞いて目を覺ました。私は頭を揚げた……

實に不思議な話だ！ 私は前通り馬車の中に眠てゐるのだが、馬車のぐるりはその縁から半呎以内の所まで來てゐる水が、小さなはつきりした震へる渦に碎けて月光にきら／＼と照り輝いてゐる。私は前を見た。馭者臺には脊を屈め、頭を垂れてフィロフィーが彫像の如く坐つてゐる。少し向うには小波の立つ水の上に、私は彎曲した軛の弓形と、馬の頭と脊とを見た。凡てのものが何か魔法の國の様な所にでも、夢の中にでも——仙境の夢の中にでも居る様に、昵として音をも立てずにゐる……『一體何うした譯であらう？』私は馬車の覆の下から見返つた……『何のことだ、我々は川の真中にゐるのである！』……岸は我々から三十歩を距



てゐる。

『フィロフィー』と私は叫んだ。

『何でございます？』と彼は尋ねた。

『おい、本當に！一體俺達は今何處にゐるんだ？』

『川の中でございます。』

『川の中だつてことは解つてるが、これぢや今にもぶく／＼といつちまひさうぢやないか、いつちまひさうだぜ。お前達は何時もかうして渡るのかい？ え？ 何だ睡ねてるのかい、フ

ロフィーー 4852211』

『一寸間違ひました』と私の案内者は云つた。『片つ方の方へ寄つちまひました、少々失敗しくじりりました。だが少々許り待つてる方が宜しい。』

『少々許り待つてる方が宜しい？ 一體何を待つてるんだ？』

『いや、このむくむくにそこいらを見廻させなくちやなりません。あいつの頭を向ける方へ行つたら宜しいんですからな。』

私は乾草の上に起き直つた。軸馬の頭は全くぢつとして動かない。頭の上には只明るい月の光の中に、微かに前後へ振り動かされてゐる耳丈けが見える。

『何だ、あいつも睡ねてるんだな、むく毛の奴も！』

『いゝえ』とフィロフィーが答へた。『今水を嗅いでゐるところでございますよ。』

復び凡ての物が靜かになつた、只前の如くゴウ／＼といふ水の微かな音丈けが聞えてゐる。私は無感覺の状態に陥つた。

月の光と夜と川と、そして我々がその中に……

『あの變な音は何だらう？』と私はフェロフィーフェロフィーに尋ねた。

『あれでございますか？ 葦の中葦の中にゐる鴨か……でなければ蛇でございますかな。』

不意に軸馬の頭が揺れて、兩方の耳がびんと立つた。彼は鼻息を荒くして動き出した。

『ほら、ほら、ほら、ほら！』とフェロフィーは不意にある限りの聲を絞つて喚き始めた。

彼は坐り込んだ儘頻りに鞭を振廻した。馬車は直ちにそれがくつ附いてゐた場處から引出されて、前の方へ川の流を切り裂き乍ら、彼方此方へ揺れたり、傾げたりしながら進んで行つた……初めのうちは我々が漸く深く沈んで行く様に思はれた。然し二三度引張られ揺られた後では、水の表が俄に低くなつた様に思はれた……水は、水の表は漸々と低く低くなり、馬車はそれから抜け出て来る様に思はれた。さうして今や車や馬の尻尾が見えて來た。今度は大な雫しづくをばら／＼と飛び散らせ乍ら、ダイヤモンドの雨を——いや、ダイヤモンドではない

——朧な月の光を映した碧石の雨を降らせ乍ら、馬は元氣好く一引き引張つて我々を砂の岸へ引上げた。そしてその輝く白い脚を競ふ様に閃かし乍ら、小山の草の方へとつとと驅けて行つた。

『さてフィロフェーが何といふだらう？』といふ考が私の心の中に閃いた。『御覧なさい、私の云つた通りでせう！』とか何とか云ふであらうと思つた。然し乍ら彼は何にも云はなかつた。そこで私も彼の不注意をせめるに及ばないと思つた。そして乾草の中に横はり乍ら、復び眠ようと試みた。

しかし私は眠られなかつた。それは私が獵に疲れてゐたからでない。又私の今通つて來た興奮的な經驗が眠氣を拂つて了つたからでもない。それは寧ろ我々が誠に美しい田舎景色の中を駈けさせてゐたからである。そこには豊かな廣々とした草茂き川沿ひの牧場があつて、それには無数の小さな池や、小さな湖水や、小川や、入江などがあつて、又その端には絹柳だとか何だとかいふ様な小さな木が生え繁つてゐる——全く露西亞風の景色である。我々の古い傳説にある勇士等が馬に跨つて、白い白鳥や、灰色の鴨を撃ちに行つたといふ様な景色を思はせる露西亞人の好きな景色である。我々の進んで行く道は、黄色なりボンの様にうねつ

てゐる。馬は軽く駈けてゐる——私は眼が閉ぢられない。私はこの景色に見惚れてゐたのである！ さうして凡てのものが懇ろな月の光の下に柔かく溶け合つて浮び漂うてゐる。フィロフェーは——彼も又それに感動してゐた。

『この邊を聖エゴルの牧場つて云ふんです』と彼は私の方へ振向き乍ら云つた。『それからこの向うに大公の牧場といふのがありますが、露西亞中何處へ参りましたもこんなのはありません……いや、どうもいゝ景色ですな！』

軸馬は鼻息を荒くして體を震はした……『神様がお前の上に祝福をお授け下さるやうに』とフィロフェーは低い調子で嚴かに云つた。『何といふいゝ景色だらう！』と彼は溜息を吐き乍ら繰返した。それから彼は長い唸り聲を洩らした。『もう草刈時もやつて來ましたが、どの位秣が刈れるとお考へになります！——本當に山の様ですよ！——そして入江には魚がどつさり居ります。そりや立派な鯛が！』と彼は態とらしげな聲で附け加へた。『兎に角、世の中は面白いものですな——死ぬにや及びませんよ。』

彼は不意にその手を舉げた。

『ほう！ 御覧なさい！ 湖水の上に……あすこに立つてるのは鶴でせうか？ 鶴は夜分魚をとるものでせうか？ なあに！ あいつあ枝だ、鶴ぢやない。うむ、間違つた！ お月様には

何時でも騙される。』

かうして我々は漸々と進んで行つた……が、すでに牧場の端へ行き著いて、小さな林と畠とが見えて来た。片側には小さな村が二つ三つの燈火を閃かした——それは今や本街道へたつた四哩しかなかつた。私は眠つて了つた。

又もや私は自分から眼を醒まさなかつた。今度はフィロフェーの聲で呼び醒まされた。

『旦那！……若し旦那！』

私は起き上つた。馬車は往來の真中の平らな處に立止つてゐる。馭者臺の上で眼を巨きく見開き乍ら、私の方へ向き直つたフィロフェーは（私は全く彼の眼を見て驚いた。私は彼がこんな巨きな眼を有つてゐるとは夢にも思はなかつたのである）不思議な意味を籠めて囁いてゐるのである。『音が！……車輪の音が！』

『何だつて？』

『音がするんですよ！ 屈み込んでお聞きになつて御覽なさい。聞えませう？』

私は馬車から頭を出して息を殺してゐた。そして我々よりずつと後ろのどつか遠い處に、車輪の音か何ぞの様な微かな途切れぐの音を聴きとらへた。

『聞えませう？』とフィロフェーが繰返した。

『うむ、聞える』と私は答へた。『何か車でも来るんだな。』

『まあ、聞えませんか……しつ、しつ！ 手鼓が……それに口笛も……聞えませう？ 帽子をお脱りになれば……もつとよく聞えませう。』

私は帽子を脱りはしなかつたが、耳を澄まして聴いた。

『うむ、さうだ……さうらしい。だがあれが何うした？』

フィロフェーは馬の方へぐるりと向き直つた。

『小馬車がやつて来るんです……軽い、鐵製の輪です』と彼は云つて手綱を取上げた。『悪い奴が来るんですよ。旦那、この邊ちやツウラ近くぢやよくいろんな悪戯をするんです。』

『馬鹿な！ 何うして悪い奴に違ひないなんぞと極めるんだ？』

『私の云ふのは本當のことです……手鼓を叩いて……それから空馬車に乗つて……それになくつて誰でせう？』

『ふむ……ツウラへはまだ餘つ程あるのかい？』

『まだ十二哩もございます。それに此邊にや一軒だつて人間の住家はございませんな。』

『ふむ、ぢやもつと速くやれ。愚圖々々してゐたつてしようがない。』

フィロフェーは鞭を振上げた。さうして馬車は復び動き出した。

私はそれ程フィロフェーを信用した譯でもないが、兎に角寝附かれなかつた。『本當にさうだつたら何うだらう？』厭な心持が私の中に動き始めた。私は馬車の中に起き直つた——それ迄横になつてゐたのである——さうして四方を見廻はし始めた。私が眠つてゐた間に薄い霧が、地上へ下りては來ないけれど、一面を罩めて來た。それは高く立ち罩めてゐるので、月はその中に白く染め抜かれて、丁度煙の中にでもある様に見えた。凡ての物が朦朧として、區別が附かなくなつてゐる——地面に近い處は比較的にはつきりしてゐただけけれど。四邊は一面に平らな淋しい田舎景色である。畑に畑が続いて、畑の外に何物もない——處々藪があり谷があるけれども又畑である。大概は休ませてあつて、僅か許りの埃だらけな草などが生えてゐる。本當に詩の様な……荒野だ！せめて鶉が一羽でも鳴いて呉れたら！

我々は半時間許りも進んで行つた。フィロフェーは絶えずその鞭を鳴らしたり、舌打ちをしたりし續けたが、二人とも一言も口を利かなかつた。兎角して我々は小山の原を登り切つた……フィロフェーは手綱を引締めて、馬を停め、直ぐに又云つた——

『あれは車輪の音でございます。旦那。さうです、車輪の音でございます！』

私は復び馬車の外へ頭を突き出した。しかし幌の下にぢつとじてゐてもよかつた——まだ

遠方からではあるが、随分はつきりと車の音や、人の口笛を吹くのや、手鼓を打鳴らすのや、馬の蹄の地を打つ響すら私の耳へ聞えた。私は、歌を歌つたり、笑つたりしてゐるのが聞えた様にさへ思つた。成程風はそちらから吹いてゐる。が、何者とも知れぬ旅人等が、一哩かことに依つたら二哩も我々に近寄つて來たのは疑を容れない。フィロフェーと私とは互に顔を見合せた。彼は只その帽子をぐつと前へ引張つて、手綱にのしかゝる様にし乍ら馬に鞭を呉れた。馬は一足飛びに駆け出したが、それも長く續かないで、復び當り前の驅足になつて了ふ。フィロフェーは續け様に鞭を加へた。我々は何うしても逃げなければならぬのである！私は最初のうちはフィロフェーの様な心配はしてゐなかつたのであるが、何うしたのか此時不意に我々は實際追剝につけられてゐるのだといふことを確かに感じた……私は別に何等の新しい物音をも聞かなかつた。同じ手鼓の音、同じ空車の音、同じ切れぐに續く口笛、同じがやくといふ物音でありながら……今私は何の疑ひをも抱かない。フィロフェーの言葉に間違はあり得なかつた！

さて、又二十分許りも経つた……この二十分の間、我々自身の馬車のガラ／＼ゴロ／＼といふのに混つて、他のガラ／＼ゴロ／＼も聞えた……

『停めろよフィロフェー』と私は云つた。『駄目だ——どつちしたつて結局同じだ！』

フィロフィーは元氣の無い聲で『どう！』と云つた。馬は早速踏み停つた——休息の機會を得たのを喜んだかの様に。

『大變なことになつて來た！』手鼓は我々の直ぐ後でボン／＼と鳴つてゐる。馬車はガラガラゴロ／＼と鳴つてゐる。人は口笛を吹いたり、叫んだり、歌つたりしてゐる。馬は鼻を吹き鳴らしたり、蹄で地面を踏み叩いたりしてゐる……

我々は追ひ附かれた！

『困つたことだ。』とフィロフィーは力の籠つた低い聲で云つた。そして思ひ切り悪く鞭を振り鳴らして、今一度馬を勵まさうとした。が、その瞬間に突然ひゆうと風を切る様な音が聞えて、恐ろしく大きな幅の廣い馬車が、三頭の瘦馬に牽かれて、豪い勢で我々に追ひ付き、その儘前へ駆け抜けたが、直様並足になつて道を塞いだ。

『全く追剥の遣口だ！』とフィロフィーは呟いた。私も全くの所ぞつとした……私はそれでも霧の立ち罩めた月夜の薄暗がりのうちに、緊張した注意を以て、眼の前をちつと見詰めた。我々の前の馬車には、半分は横になり半分は坐つて——シャツを著た、荒い外套にボタンを掛けない六人の男がゐた。その中の二人は帽子も冠つてゐない。長靴を履いた大きな足は、車の欄干にかゝつてぶら／＼してゐる。腕は矢鱈に上つたり下つたりしてゐる……體は前後に

ぐらつてゐる……これは疑もなく酔拂ひの仲間だ。或者は矢鱈に喚き騒いでゐ、或る者は頻りに口笛を吹いてゐる。或者は惡體をついてゐる。馭者臺には肩衣を著た巨人の様な奴が馬を驅つてゐる。彼等は我々に何の注意をも拂はないかの様にゆる／＼と駆けさせて行つた。如何にすべきであるか？ 我々もゆる／＼と駆けさせ乍ら、彼等の後について行つた……我々は外に仕様がなかつたのである。

四五丁の間はこんな風にして進んで行つた。何方とも附かない状態は實に苦しかった……護るいふのは、自分自身を護るといふのは、もう問題にならなかつた！ 彼等は六人である。そして私はステッキ一本すら持つてゐない！ 引返さうか！ しかし彼等は直ぐに我々を捕へるであらう。私はジュコフスキーの句(そこで彼はカーメンスキー將軍の虐殺を語つてゐる)を想ひ出した——

『卑しき追剥の忌まはしきもの！……』

でなければ——汚ない繩で首を絞められるか……溝の中へ叩き込まれる……その中で良にかゝつた兎の様に息が窒つて藻掻く……

いや恐ろしいことだ！

彼等は前の通り我々に何の注意をも拂はないで、並足で駆けさせて行つた。

『フィロフィー！』と私は囁いた。『一寸もう少し右へ寄せて、通り抜けられるかどうか、やつて見よ。』

フィロフィーはやつて見た——右へ寄せた……けれども彼等も直ぐに右へ寄つた……通り抜けるのは不可能であつた。

フィロフィーは今一度やつて見た。彼は左へ寄せて見た……然し又もや彼等は馬車を通り抜けさせなかつた。彼等のみならず聲高に笑つた。それは彼等が我々を通さないといふ意味だつた。

『愈々悪者に相違ありませんな。』とフィロフィーは肩越しに私へ囁いた。

『だがあいつらは何を愚圖々々してゐるんだらう？』と私も亦小聲で尋ねた。

『あの向うの——川の上の——窪地の——あの橋へ行く迄……あすこで、私達をやつつけるんでせう！ いつもあの手ですからな……橋の處で。もう間違ひつこはありませんよ旦那』彼は太息と共に附け足した。『とても生かしちや歸しますまい。あいつ等もばれない様になくちやならないんですからな。旦那、私はたつた一つ残念な事がありますよ。私の馬が失くなると、兄弟共はもう馬が持てませんからな！』

私はその時フィロフィーがこんな場合にもまだ、馬のことなどを氣にしてゐられるのを驚い

た筈であらう。けれども正直に云ふと私はフィロフィーのことなど全で考へてゐなかつた……『奴等は本當に私を殺すだらうか？』と私は心の中で繰返しつゞけてゐた。『何故に奴等は私を殺さなければならんか？ 私は持つてゐる物を残らず奴等に遣つてしまはう……』

さて、橋は漸々と近くなつて來た。それは漸々とはつきり見える様になつて來た。

忽ち鋭い関の聲が聞えた。我々の前の馬車は宛ら疾風の如く突進した。そして橋の所迄行くくと直ぐ少し許り道の片つ方へ寄つてびたりと停つた。私の心は鉛の如く沈んで了つた。

『おい、フィロフィー』と私は云つた。『何うしてもこりや助からない。お前をこんな目に遇はして濟まなかつた。』

『貴方の咎かなんかの様に仰有るんですな旦那！ 運といふ奴は何うにもしやうが御座いませんよ！ さあ尨、頼みだぞ』とフィロフィーは軸馬に言葉をかけた。『やつてくれよ！ お終ひの奉公だ！ どつちにしたつてつまりは同じ……』

彼は馬を勵まして、だくを駈けさせた。我々は漸々とあの橋へ——あのぢつとして動かない嚇かす様な馬車に近くなり出した……馬車の中は態とらしく静まり返つてゐた。只の一聲も洩らされない！ それはバイリや鷹やあらゆる肉食獸の、獲物が近づく時に示す静けさであつた。さうして今我々は向うの馬車と並んでゐた……と、出し抜けに肩衣を引かけた大男が

馬車から飛び出して、我々の方へずつとやつて来た！

彼はフィロフィーに何にも云はなかつたが、フィロフィーは我れ知らず手綱を引絞つた……馬車は停つた。

大男は兩腕を馬車の戸にかけた。そしてそのむく毛頭を前屈みに突出し乍ら、にや／＼笑ひ乍ら、物とらかな穏やかな聲で、職人風のアクセントで次の様なことを云つた——

『旦那、俺等は後ろ暗くない酒を飲んで来たんでさあ——婚禮の酒をね。仲間の野郎を一人婚禮さしてやつたんで——詰り床入をさしてやつたんでさあ。俺者あ皆な向う見ずの若い者でしてね——それに酒はうんとある、酔を醒ますものは何にもねえと來とりやすからな。どんなものでせう旦那、仲間にもちよつぱりほんの一杯で好いが飲ましてやつて下さるめえか？ さうすりや旦那の爲めに祝盃を舉げて、永く旦那を記念するといふ事にするんですがな。だ  
が承知して貰はれなけれや——いやまあ、お怒りにならないで下せえましょ！』

『はて、こりや何うしたことだらう！』と私は考へた……『巫山戯てゐるのか？……嘲弄つてゐるのか？』

大男は頭を下げた儘立續けてゐる。丁度其刹那に月は霧から現れて彼の面を明るく照らした。顔にも目にも唇にもせ／＼ら笑ひがあつた。然し嚇かす様な何物も見えてゐなかつた……

只少しも油断しないといつた様な容子があつた……そして齒が誠に白く大きかつた……

『お安い御用だ……これを上げよう……』と私は急いで云つて、ポケットから財布を引出し、二留の銀貨を取り出した——その時分は、銀貨が露西亞中に通用してゐたのである——『さあ、これで宜いかい？』

『大きに有難う御座います！』と大男は軍隊風に大聲で云つた。そして彼の肥つた指がひらつと動いて、私の手から——財布全體をでなく——只二留丈けを掠めた。『大きに有難う御座いました！』彼は髪の毛を後ろへ振り退けて、馬車迄駈けて行つた。

『おい——』と彼は叫んだ。『旦那が銀貨を二留下すつたぞ！』彼等一同は一度にが／＼と云ひ出した……大男は轉がる様にして馭者臺へ上つた……

『旦那、御機嫌宜う！』

さうして、それが私共が彼等を見た最後であつた。馬はとつとと駆け出して、馬車はガラガラと小山を登つて行つた。今一度馬車は地と空とを分つ薄暗い線の上に影を現はしたが、又もや沈んで、消え失せた。

さて、今や、車の音も、喚き聲も、手鼓も聞えなかつた……  
そこには死の様な沈黙があつた。

フィロフェーも私も直ぐには元氣を恢復し得なかつた。

『いや、却々面白い奴だ！』とフィロフェーは遂に口を切つた。そして帽子を脱いで十字を切り始めた。『冗談の好きな奴だな、全く』と彼は付け加へた。そしてすつかり晴れ／＼とした顔をして私の方へ振り向いた。『だがあいつ却々の奴ですぜ——全く！さあさあ、お前もしつかりしろ！ 助かつたぞ！ 皆な助かつたぞ！ 私達を通すまいとしたのもあいつで、馬を追つてつたのもあいつだ、何といふおどけた眞似をする奴だらう！ さあ、さあ！ 出た、出た！』

私は何にも云はなかつたが、心の中には矢張り悦ばしく感じた。『我々は助かつた！』と私は私自身へ繰り返して、乾草の上に横たはつた。『安上りで済んだ！』

私はジユコフスキーのあの句を想ひ出したのを恥かしいとさへ思つた。  
不意に私は想ひ浮んだことがある。

『フィロフェー！』

『なんですか？』

『お前女房はあるかい？』

『はい、あります。』

『子供は何うだい？』

『子供もあります。』

『どうしてお前はその事を思はなかつたんだ？ お前は馬ばかり氣の毒がつてゐたが、女房や子供のことは氣にならなかつたのかい？』

『氣になる譯がありません！ あいつらが泥棒に捕まるといふぢやなしね。だが、始終腹の中ぢや忘れりやしませんよ。それで今だつて……そりやもう。』フィロフェーは言葉を切つた……『大方……あいつ等の爲めを思つて、全能の神様は私達をお助け下さつたのかも知れません。』

『だが、あれが追剥でなかつたら？』

『そりや何とも云へませんな！ 他人の心の中へもぐり込む譯には行きませぬまい？ 他人の心てやつは全く見當がつきませんからな。だが、胸の中に神様を念じてさへ居りや、何時でも物はうまく行きますよ……何うして、何うして……うちの奴等のことは始終もう……こつちだ……こつちだ！ おい、おい！』

既に殆ど明るくなりかゝつてゐた。我々はツウラの町へ這入りかけた。私は夢を見て居る



様な、半ば眠つてゐる様な心持で横たはつてゐた。

『旦那』とフィロフィーはだしぬけに私に云つた。『どうです、あいつ等があゝの居酒屋の前に停つてゐますよ……あいつらの馬車が。』

私は頭を上げた……成る程彼等がゐる、そして彼等の馬車や馬もゐる。不意に居酒屋の戸口に例の肩衣ケイブを引懸けた大男が現はれた。『旦那！』と彼は帽子を振り乍ら叫んだ。『俺等おつしあ旦那の爲めに祝盃を舉げてるところでさあ！——やあ馬丁さん』と彼はフィロフィーの方へ頭を振り乍ら附け加へた。『お前さん少々許り怖がつてゐたね。いや無理もねえよ！』

『面白い奴だ！』とフィロフィーは我々が居酒屋から五十碼近くも出離れた時に云つた。我々は到頭ツウラへやつて来た。私は弾丸たまを買ひ込んだ。さうしてその間に茶や酒も買ひ、馬喰から馬まで買った。

晝頃に我々は又歸途に就いた。我々が最初後から来る車の音を聞きつけた場所迄やつて来た時、フィロフィーはツウラで一杯ひつかけて来て、大變口が軽くなつてゐたので——彼はお伽噺をさへ、して聞かした程である——彼がその場所を通り過ぎる時、不意に笑ひ出した。『憶おぼえていらつしやいますかね、旦那、私が云ひつゞけにしたのを、「音がする、車の音が」つて云つたのを！』

彼は幾度かその手を振つた。この表白が彼には何よりも面白かつたのである。その晩に我は彼の村へ歸つた。

私は我々の上に降りかゝつたこの出来事をイェルモライに語り聞かした。大眞面目に聴き乍ら彼は何等の同情をも云ひ表はさなかつた。彼は只唸き聲を出した——それが賞讃のつもりであるか、非難のつもりであるかは、思ふに彼自身にも分らなかつたであらう。然し二日程経つてから、彼は大きいなる満足をもつて私に告げ知らした——フィロフィーと私とがツウラへ行つた恰度あの晩、而も丁度あの道で、一人の商人が掠奪され屠殺されたといふ事を。私は始めこれに多くの信用を置かなかつた。けれども後にはそれを信じないでゐられなくなつた。それは態々其爲めに馬を飛ばせて来た巡查部長によつて云ひ確かめられたからである。

ことによると、それはあの元氣の好い連中が婚禮の戻りだと云つたその『婚禮』ではなかつたらうか？——あのおどけた大男の言葉に『床入をさして』とあつたが、床入をさせられたのはこの商人でなかつたらうか？ 私はその後五日許りフィロフィーの村に逗留してゐた。私は彼に會ふ度毎に何時でも云つた。『車の音は？え？』

『面白い奴でしたな！』と彼は何時でも答へる。さうして笑ひ出したものである。

## 森と野

「徐ろに物ありて彼を引き返し始めたり、

田園へ、小暗き苑へ。その處には、

いと大なる菩提樹のいと陰ふかく、

山百合は少女のごとく匂ひ、

柳の圓葉は汀の上に堤より

列り垂れたり。その處には、

硬き榭の木の硬き野の上に生ひたり、

麻、蕁麻の香にまじりて……。

牧の野の遠く擴ぐる其處にして——

その處には、大地の天鷲絨の如く豊かに黒く、

よきライ麥は目もはるに

音もなくゆるやかに浪を打ち、

またその處には、金色の強き光の、

まろき、眞白き、透き通りたる雲より注がるる。

——其處にして物みなよろし……

(焰にさゝげられたる詩より)

讀者諸君は恐らくすでに私のスケッチに退屈されてゐることであらう。私は既刊の斷片をもつて私の筆を擱くといふ固い約束をすることに急ぎ度い。然し乍ら今獵人生活と別るゝに際して、尙數言を費さずには居られない。

犬を連れ、鐵砲を肩にして獵に出るのは、昔から云ひ慣らはしてゐる通り、その事自身が既に面白い。が、諸君にして遊獵家と生れなかつた迄も、矢張り自然が好きであるとしたならば、諸君は即ち我々遊獵家を羨望せず居られまい……まあ、お聴きになつて下さい。

例へば諸君は春の夜明け前に出て行く時の悦びを知つてゐるか？ まづ、諸君は階段の上に出て来る……濃い灰色の空には星が其處此處に瞬いてゐる。濕り氣をもつた微風がそよそよと吹いて、折々諸君の肌に觸れる。そこには祕密の何物とも知れぬ夜の囁きが聞える。樹木は暗黒に包まれて、微かにさはめく。さて、人が馬車の幌を引いて沸湯を入れた箱を諸君の

足許に置く。鞍馬が休みなく體を動かし、鼻息を吹き、氣六ヶしげに地を搔く。今眼を醒ました許りの白い鷺鳥が一番ゆるくと靜かに體を揺り乍ら道を横切る。生垣の向うの庭の中には、番人が平和な躰をかいてゐる。凡ての物音が凍つた空氣の中にちつと停つてゐる様に見える——途中に喰ひ止められて動かすに。諸君は腰を掛ける。馬は直ぐに踏み出す。馬車はゴロ／＼と高い音を立て、輻り出す……諸君は馬を驅つて行く——教會を過ぎて右の方へ丘を下り、堤を横切つて驅つて行く……池は今しも霧で蔽はれさうになつてゐる。どちらかといへば冷や／＼とする。諸君は毛皮の外套の襟を引立て、顔を隠す。諸君はうと／＼と夢心地になる。馬の蹄が音高く水溜りを撥かす。馭者が口笛を吹き始める。然し今や諸君は三哩をやつて來たのである……空の縁に眞紅の色がさす。樺の木の中で不器用に翼鼓をしたながら鴉の鳴いてゐるのが聞える。雀が黒すんだ積草の周りにチュウ／＼と鳴いてゐる。空氣はより清らかに道は、よりはつきりとして來て、空も明るくなり、雲もより白くなり、野もより緑に見えて來る。小屋の中には燃える木片の赤い光が見える。門の中から眠むさうな人聲が聞えて來る。兎角するうちに、曉の色が燃え初める。既に金色の縞の幾條かど、空を横切つて擴がつてゐる。霧は雲の様に谷の上に集まつてゐる。雲雀は調子よく歌つてゐる。黎明の先導を勤める微風が吹いてゐる。そして紫色の太陽がゆる／＼と上つて來る。そこに光

は洪水のやうに満ち渡つてゐる。讀者の胸は小鳥の様にはゞたきをする。凡てのものが生々として爽やかに楽しい！人は四方を遠くまで見渡すことが出来る。そちらに、森の向うに村が一つ。それからずつと遠く、白い教會堂を有つた今一つの村があり、丘の上に樺の林がある。その後に諸君の行かうとする沼があるのだ……より速かに、馬よ、より速かに！速足にとつとと進め！もう三哩許り——それより餘計はない。太陽は見る／＼高く昇つて行く。空は清らかである……いゝ天氣になるであらう。家畜の一群がぶら／＼と村から我々の方へやつて來る。諸君は小山に登る……何といふ眺望であらう！川は霧を透して朧ろに青く十哩の間をうねつて流れる。川の向うは水の様な緑の牧場。牧場の向うは勾配のゆるい小山。遠くでは千鳥が沼の上を聲高に鳴き乍ら舞つてゐる。空中に充ち満ちた潤ひのある輝やかしさを透して、遠くの方はかつきりと見える……夏の様でもなく。人は如何に思ひの儘に空氣を吸ひ、如何に活潑に手足を動かし、如何に全身の強壯を感じて、春の爽やかな呼吸の中に抱かれることであらう！……

さて又夏の朝、七月の朝、夜の明け際に下生の間をさまよひ歩くことの樂しさが、遊獵者ならぬ何人に解らうぞ？ 諸君の足跡は露に白い草の上に、一筋の線を残す。諸君は濡れた繁みを分けて行く。夜の間に貯へられた燈心草の暖か味を帯びた好い匂ひに出逢ふ。空氣は苦

溼の爽やかな苦味や、蕎麥だのうまごや、しだのの蜜の様な甘さに浸つてゐる。遠くの方に榎の木が壁の様に突立つて、太陽に燃え輝いてゐる。まだ朝の爽やかさは残つてゐるが、既に暑さの近附いてゐる事を思はせる。頭は甘い匂ひの夥しさに眩暈が付きさうである。森は漉しもなく擴がつてゐる……只處々に遠く熟したライ麥が黄ろく光り、莖の赤い蕎麥の、狭いうねが見える許りである。其時車の輪の軌る音がする。一人の百姓がのそり／＼と繁みの中へ這入つて行く。そして日盛りの暑さの来る前に馬を木蔭に入れておく……諸君は彼に挨拶して行つて了ふ。さや／＼といふ調子の好い鎌の音が諸君の後に聞える。太陽は漸々と高く昇つて行く。草は見る／＼乾いて行く。さうして今や全く蒸し暑くなつた。時は一刻々々と過ぎて行く……地平線の上は空が薄暗くなる。静かな空気は刺す様な暑さでいりつけられる……『おい、この邊で何處へ行つたら水が飲まれるだらう？』と諸君は草刈に尋ねる。『向うの谷の中に清水がありますよ。』蔓草の這ひまはつた、こんもりとした槇の藪をくゞつて、諸君は谷底へ下りる。唾の眞下に小さな泉が隠れてゐる。榎の茂みが慾張りらしく大きな指の様に其枝を水の上に擴げてゐる。巨きな銀の様な水玉が細やかな天鷲絨の様な苔に掩はれた底から、むく／＼と湧き上つて来る。諸君は地面に體を投げ出して飲む。所で、體を動かすのが面倒な様に思はれる。諸君は樹蔭へ這入つて、しつとりした匂ひを吸ひ込んで寛ぎ休む。そのうちにも眼の前の茂みは日に燃立つて来て、宛ら黄色になる。だがそれが何であらう？ 不意に一陣の風が吹き起る。四邊の空氣がざわつき出す。それは雷でなかつたか？ 暑さが増して来るのか？ 嵐がやつて来るのか？……さて今微かに電が閃いた……あゝ、これは嵐である！ 太陽はまだ燃えてゐる。諸君はまだ獵を續けることが出来る。けれども嵐雲は漸々擴がつて来る。その前の端は長い袖の様に引延ばされ、アーチの様に垂れて来る。草や、茂みや、四邊の凡てのものが暗くなる……急げ！ 向うに乾草小屋が見える様に諸君は思ふ……急げ！……諸君は其處へ驅けつけて飛び込む……何といふ雨であらう！ 何といふ電であらう！ 雨滴は草葺屋根の穴を漏れて、匂ひのいゝ乾草の上へ落ちる……が今や太陽は復びきらく／＼と輝いてゐる。嵐は過ぎた。諸君は小屋を出る。あゝ凡てのもの悦ばしげなる光よ！ 爽やかな透明な空氣や、苺だの苺だの匂ひ！ それから晩がやつて来る！ 煌々たる火炎が燃え立つて半天を掩うてゐる。太陽が没する。近くの空氣は水晶の様な一種特別の透明さを有つてゐる。遠くには軟かな温かさうな靄が懸つてゐる。つい先刻まで透明な金色の洪水を浴びてゐた野面には、露と共に眞紅の光が注がれる。木や藪や高い積草からは長い影がひかれる……太陽は没した。星が一つ日没の火の海に輝き震へてゐる……さて今や其火の海も色が褪せ、空は青くなつて来る。一つ／＼の物の影が消える。四邊は闇に掩はて了ふ。も

六七七

う今夜泊るべき小屋へ引返すべき時である。鐵砲を肩にして諸君は疲勞にも關らずさつさと歩き出す……其うちに夜は迫つて来る。今や諸君は二十歩の先きを見分ける事が出来ない。犬は暗闇の中に仄白く動いて行く。向うの眞黒な森の上には地平線上に漠とした明るみがある……あれは何であらうか——火事であらうか？……否、それは月が昇るのである。そのすつと下に、右に寄つて、村の灯がすでにチラ／＼と瞬いてゐる。……それから遂に諸君の小屋へ著いた。小さい窓を透かして白い布をかけた食卓が見える、蠟燭が點つてゐる。夕食だ……

又、ある時は諸君は早馬車を仕立てさせて、山鶴を打ちに森へ出掛ける。兩側のライ麦が高い壁の様になつてゐる狭い小徑について出掛けて行くのは愉快なものである。麥の穂が軽く面にあたる。矢車菊が諸君の兩脚にまはりかゝる。鶉があたりに呼ばはつてゐる。馬はゆる／＼とねつて行く。さて遂に森へ来る。深く生ひ茂つてしんとしてゐる。優美な白楊が高く頭の上にサラ／＼と鳴る。樺の木長く垂れた枝は殆ど動かない。巨きな櫟の木は可愛らしい菩提樹の傍に優者の如く突つ立つてゐる。諸君は影で縞になつてゐる緑の小徑に沿うて行く。大きな黄色な蠅が日の光を浴びてちつと宙にぶら下つた儘ゐたが、不意に飛んで行つて了ふ。蟻子が雲になつて群がつてゐる。影では白く日向では黒い。鳥は長閑に歌つてゐる。のじこの金の様な小さな聲は谷の百合の匂ひと相和して、罪のない浮立つ様な悦ばしさを歌

ふ。更に遠く奥深く森へ這入れれば……森は愈々繁つて来る……何とも云へない静けさが心の中を襲うて来る。外もまた凡てが静かで夢の様である。然し乍ら今一陣の風が吹き起つた。そして樹々の梢は碎ける浪の様にざはめき立つ。此處かしこに去年の枯葉の下から高い草が延びてゐる。茸は鍔の廣い帽子を被つて離れ／＼に立つてゐる。忽ち一匹の野兎が跳び出す。犬は森に響く吠え聲を張り上げて其の後を追つかける……

さて、此同じ森が秋晚く鶉の飛び立つ時分にどんなに美しいものであるか！鶉は森の奥に引込んで、ゐないから、人は其裾を探さなければならぬ。そこには風もなく太陽もない。光もなく影もなく、そよぎもなく音もない。秋の匂ひは酒の匂ひの様に和かな空氣の中に漲つてゐる。薄い靄が遠方の黄色な野の面を罩めてゐる。静かな空は裸になつた蔦色の枝を透かして、平和な屈托のない白い光を見せてゐる。ところ／＼菩提樹などには金色の朽葉がくつ附いてゐる。しつとりとした地面は諸君の足の下に弾力を有つてゐる。枯れた草の長い葉はそよもしない。長い蜘蛛の圍は晒された芝生の上に露を含んで白く光つてゐる。諸君は心靜かに息をする。然し心の中に不思議な震へがある。諸君は森の縁について犬の跡を追つかけて行く。すると愛してゐた姿、愛してゐた顔が、死んだのも、生きたのも、諸君の心に浮かんで来る。永く／＼眠つてゐた印象が思ひがけなく眼を醒ます。想像が鳥の様に飛び立つて、驅

け上る。凡てのものが非常に、つきりと動いて、まさしくと眼の前に見える。心臓は一頻り鼓動を高めて熱烈に前の方へ突進しようとする。かと思ふと聲も届かない様な遠い記憶の中へ復びおぼれ去つて了ふ。諸君の全生活はさら／＼と眼の前に繰り擴げられる。人は斯くの如き場合凡ての其の過去を、凡ての其の感情と、その力とを——凡ての其の魂を所有する。さうして四邊には彼を妨げる何者もない——太陽もなく、風もなく、音もない……

また、澄切つた寒い位な秋の日の朝毎に霜を見るやうになれば、樺の木が昔話の中にある樹の様にすつかり金色になつて、薄青い空を背景にかつきりと繪の様に浮き出て来る。太陽は低くなつて来て、暑くはしないが、夏よりもより輝かしく照らす。小さな白楊の森はそ裸かを氣安く悦んでゐるかの様に一體にピカ／＼と光つてゐる。霜は窪地の底にまだ白く残つてゐる。すると爽やかな風がそよ／＼と吹き起つて、乾反つた落葉を追ひまくる。青い連はうつかりしてゐる鶯鳥や家鴨をリズムカルに揺り上げ乍ら、悦ばしげに川の面を傳つて行く。遠くには半ば柳に隠された水車が軋つてゐる。様々な色彩をもつた鳩が、その上の澄切つた空氣の中に輪を描いて飛んでゐる……

夏の懶げな日も、獵をする人々こそ好まないけれど、又却々に趣きのあるものである。さういふ日には鳥がすぐ足許から飛び立つて、直ちに霧の下りてゐる仄白い闇に消え失せるので

撃つことは出来ない。けれども四邊の平和なことは、何とも形容し難く平和なことは！凡てのものが醒めてゐて而も凡てのものがひつそりしてゐる。諸君は或る樹木の傍を通る。樹木は一葉をだにも動かさない。それは休息の中に思ひ耽つてゐるのである。萬遍なく空に充ち渡つた蒸氣の様な薄い霧を透かして、諸君の前には長い黒い條がある。諸君はそれを直ぐ近くの森だと思ふ。で諸君が行つて見る——と森は境の堀に高く並んでゐる苦蓬と變つて了ふ。諸君の上にも周りに、四邊一面に——霧だ……が、今微風が微かに吹き起る。薄青い空の一片がぼんやりと覗き出す。薄れ行く宛ら煙の様な霧を透して、金色の黄色な太陽の光線がさつと射し込んで、長い川の流れ込んで、野を横切り森を跨ぐ——そして今や凡てのものが復び蔽ひ隠される。稍々暫くの間の争ひが引きのばされる。が、結局光が凱歌を揚げる時、そして温められた霧の最後の波が崩れて、平野の上に擴がり、奥深く優しく照らす高みにまでうねりうねつて消え失せる時、その太陽が如何に名状し難く燦爛壯麗を極めることであらう……

また諸君はずつと離れた田舎へ、平野地方へ出掛ける。數十哩の間といふもの諸君は側道を辿つて進んで行く、と遂に本街道へ出る。荷馬車の果しなき連りを過ぎ、庇の下に湯沸のシユッシュュと音を立てゝゐる道傍の旅館を過ぎ、明けつ放しになつた門や、井戸を後にして村

六八二  
から村へと行く。涯しなき野を横切り、緑の麻畑について、長い／＼時の間を進んで行く。鵲かさねが柳から柳へ飛びうつる。長い熊手を手に持った百姓女が畠の間をぶらついてゐる。摺り切れた南京木綿なんきんちゆんの外套を著た一人の男が、枝細工の荷籠を肩に掛けて怠るさうに足を引摺つてゐる。六頭の脊の高い足癖の悪い馬をかけた大きな田舎馬車が向うからやつて来る。敷物の隅は窓からはみ出してゐる。後うしろの方には紐で縛りつけられた袋の上に、毛皮の上衣を著た一人の馬丁が眉の所まで泥を撥ね上げて取りついてゐる。兎角して小さな田舎町に著く。其處には歪みたわんだ小さな木造の家屋があり、涯はなのない生垣や、がらんとした石屋の店や、深い谷間にかけて渡した古風な橋などがある……進め、進め……遂に平野地方へやつて来た。諸君は丘の頂から眺める。何たる眺めぞ！頂上てんじやうまで耕され蒔かれた圓い低い小山は、巨きな波のうねりをなしてゐる。灌木の生ひ茂つた谷間が其間をうねりうねつてゐる。小さな森が細長い島のように散在してゐる。村から村へ狭い小徑が走つてゐる。教會堂が白く浮き出てる。柳の立ち並んでゐる間を小川が、ちよ／＼と流れ、四ヶ所許り堤防でせき止められてゐる。ずつと離れて野の中に或る古い地主屋敷がその離家や、果樹園や、麥打場むぎうちばなどと一並びに並んで、小さな湖のすぐ傍迄建ち續いてゐる。が諸君は更に進んで行く。小山は漸々に小さく愈々小さくなる。其處には殆ど一本の樹木も見られない。こゝに至つて終つひに——限

りも知られない人跡の絶えたる平野地方へやつて来たのである！

また雪の日には降り積つた雪を越えて野兎を追ひ廻はす。軟かな雪の綺麗な眩まよしい光りに我れ知らず半ば眼を閉ぢ乍ら、鋭い凍つた空気を吸ひ込んだり、赤味を帯びた森の上の碧玉エメラルドの様な空を嘆賞したりする！……また初春の日となれば、凡てのものが照り輝き、搖ぎ始めて、大きな流れを横切つて、すでに土の溶ける匂ひがする。溶け切つた裸地には、斜めに射す日光の下に雲雀が心置きなく歌つてゐる。そして悦ばしげに飛沫と轟きとを上げながら、瀧の如き流れは谷から谷へ落ちて行く。

然し乍ら今やお終しまひにすべき時である。序でながら私は春のことまで話して来た。春には別れるのが容易たやすい。春には幸福な心すらも遠くへ行つて見たくなる……さらば讀者諸君よ！私は諸君の上に不斷の繁榮を希望する。

# 虐げられし人々

具曙夢氏譯

(全一冊)

■ 總紙數(密字版)七百三十頁 ■ 定價壹圓五拾錢、送料八錢 ■ 最上製

著者自ら此作の内容を説明して曰く……「それは、暗い陰氣な物語であつた。ペテルブルグの重苦しい空の下で、屢々人知れず秘密に行はるゝ暗い悲痛な物語の一つであつた。大都會の暗い隠れた裏通りで、馬鹿々々しい生活の沸騰や、下らない利己主義や、利害の衝突や、苦々しい淫蕩や、秘密や、犯罪や、凡て是等の病的な生活の焦熱地獄の中で行はれる不思議な隠微な物語の一つであつた——」と。そこに熱烈なる青春の戀を描き、老夫婦の悲嘆を描き、獸の如き老侯爵の淫縱と、捨てられたる母子の悲惨を描き、最後に一封の遺書總ての紛糾を解くに至る迄、人間數奇の運命を描き盡くして、滿眼の熱涙を世の虐げられ踏みつけられし人々に注ぐ。露人が聖書と共に同情の福音と稱し毎戸傳誦せる書、何人か讀んでよく泣かざるを得ん。而も本書は一面戀に破れたる沈痛の經驗を描ける作者の自叙傳にして、篇中の一青年文士は實にドストエーフスキイ其人也。此の點より見て本書は二重の興味ありて存す可し。邦文に譯して一千有餘枚の長篇、定價最も廉也。

■ 續刊 ■ 生

靈 (全二冊)

米川正夫氏譯



# トルストイ叢書

中版(約)三百廿頁  
定價七十五錢  
郵送料一冊八錢

<p>(1) <b>我が宗教</b> 生田長江譯</p>	<p>(2) <b>イワン・イリイッチの死</b> (附) 主人と下男 福士幸次郎譯</p>	<p>(3) <b>幼年・少年</b> 江馬修譯</p>	<p>(4) <b>ハチムラート</b> 相馬御風譯</p>	<p>(5) <b>闇の力</b> (附) 生ける屍 中村吉藏譯</p>
<p>近世の誤れる基督教を是正し、まことの信仰とは何ぞやを説くに、その半生の心血を濺ぎたる、にがく苦しき體驗を以てす。トルストイ著作中最重要なものの一也。</p>	<p>平凡なる一官吏の生涯を通じて「死」の問題を取扱へる小説、魂のうめきをさながらに聞く可し。附録には杜翁短篇中最も名高き「主人と下男」及び「高架索の捕虜」等あり。</p>	<p>杜翁初期の作にして生ひ立ちの記也。偉大なる靈魂の芽生と生長とは、最も靈活なる自己解剖の筆によりて遺憾なく描き盡くさる。眞に是れ萬人必ず讀む可きの書たり。</p>	<p>露國が高架索征服當時に於ける回々教の一番傑作にして、主人公として描ける小説。遺稿中の争闘は、強き力を以て人を打つものあり。</p>	<p>風光の秀れたると女の美しきを以て世界に名高き高架索に於いて若き砲兵士官トルストイがその青年期の憧憬を描ける自傳小説にして、杜翁の全作中重きをなすもの也。</p>

<p>(6) <b>コサツク</b> 廣津和郎譯</p>	<p>(7) <b>青年</b> 江馬修譯</p>	<p>(8) <b>クロイツェルソナタ</b> (附) 吹雪 廣津和郎譯</p>	<p>(9) <b>結婚の幸福</b> 谷崎精二譯</p>	<p>(10) <b>地主の朝</b> 田中純譯</p>	<p>(11) <b>贗造手形</b> 山内封介譯</p>
<p>セバストポリの陣中に於いて書けるものにして、「幼年少年」につぐ其の生ひ立ちの記也。此の曠世の偉人は生涯の危機たる青年期を奈何に過ごせるかを看ざる可からず。</p>	<p>嫉妬の爲に妻を殺せる男が夜汽車の中に兇行の事實を語るもの。告白體の談話を以て慾問題を端的に示せる高名なる小説也。</p>	<p>トルストイが其の夫人との結婚に先だつて三年前の作。過去の戀愛の追懐と未來の結婚生活の空想とを巧みに織り交ぜて、最も優しく、又最も情味に豊かなる作品也。</p>	<p>「幼年少年」「青年」に續く杜翁の自傳小説也。ロマンチックな主人公の中に在る。彼の明晰な視力と恒久の幻想は此の中に在る。」と。</p>	<p>遺稿中の一雄篇にして、結構の複雑、波瀾の重疊、杜翁全作中最も興味多きものに屬す。附録「神父セルゲイ」は彼が第二の懺悔録とも見る可きもの、沈痛悲壯なる作品也。</p>	<p>遺稿中の一雄篇にして、結構の複雑、波瀾の重疊、杜翁全作中最も興味多きものに屬す。附録「神父セルゲイ」は彼が第二の懺悔録とも見る可きもの、沈痛悲壯なる作品也。</p>

# 一人と藝術叢書

海外諸文豪の日記書簡回想記の類を輯め裏面乃至側面から直に其人と生活とを窺はしむるものである

## 第一編 トルストイ書簡集

石田三治氏譯

トルストイが全生涯の書簡の中から、その最も興味深く價值高きものを選んで譯し、それに極めて詳密親切な註解を施せるものである。叔母さんに金をねだる放蕩な士官としてのトルストイ、空想をその儘實行せんとせる若き地主としてのトルストイ、はた文豪として豫言者としてのトルストイ、人はそこに杜翁の自畫像のいろいろを見るであらう。譯者は赤門出身の新進で杜翁研究を以て知られてゐる。

## 第二編 トルストイ日記

昇曙夢氏譯

メレジニコフスキイは此の日記に就て云ふ。「要するに是れは書物に非ず、讀者との物語に非ず、己れ自らの、而して神との物語である。殆ど開えぬ程のさゝやきである。しかし、そのさゝやきは雷鳴よりも強い。雷鳴は静まるであらう、しかし此の囁きの囁くところは永劫に亘つて静まらぬであらう」と。偉大なる心靈の世にも稀れなる大苦悶の聲——人は輕々に此の書を繕いてはならない。

## 第三編 ドストイエフスキイ書簡集 (近刊) 山室暮鳥氏譯

◀ 銀六料送 ▶ 錢十六金册一 ◀ 本美製上 ▶

大正七年七月十六日印刷  
大正七年七月十日發行

(定價金壹圓五拾錢)

### ◀ 記 日 人 彙 ▶

翻譯者

生田 長江

發行者

佐藤 義亮

發行所

東京市牛込區矢來町三番地  
新潮社  
電話番町(八)八九九番

番二四七一(京東)替換

印刷所

東京市神田區宮本町五  
電話下台(四)〇六七番

新潮社印刷部

印刷者 高橋治一

# ドストエーフスキイ全集

トルストイと並んで全人類の運命を負へる大偉人と稱せらるゝドストエーフスキイの作品を、直接に露の原文より譯出して此の全集をつくる。何れも堂々たる長大篇、神魔相闘ふ人間心の大悲劇を曲盡せるもの也。

## カラマーゾフの兄弟

米川正夫氏譯  
(全三冊)

總紙數(密字版)一千八百七十頁 ■一冊壹圓參拾錢、送料八錢、

全三冊一時注文に限り郵送料共三圓八拾五錢とす

▼武者小路實篤氏曰く、驚く可き本だ。世界にこんな本は又とあるかと云ひたい。無いにきまつてゐる。之に匹敵する小説は世界に十とはあるまい。五つもあるまい。そんな氣のする本だ。驚く、驚く。ドストエーフスキイはこゝで自分が一生で得たものを残りなく表現した、情熱と愛と信仰とをもつて。この本が出れば人類は救はれる、一人のこらず救はれる、救つて見せる、さう思つて書かれたものに違ひない。▼「帝國文學」曰く、森田草平氏もガアネット女史の英譯から「カラマーゾフの兄弟」を譯さうとした。すると米川氏の譯が出たので、手に取つて見ると、「むしろ米川氏の方がガアネット女史の英譯より好い。こんな好い翻譯が出たのに今更英譯から重譯する必要はない」と云つて翻譯を見合せたと云ふ話である。

# ニイチエ全集

生田長江氏譯

▼一冊一圓六十錢  
▼送料一冊八錢、

第一編  
第二編

## 人間的な餘りに人間的な

全二冊

(版再)

別に題して「自由思想家の爲めの書冊」と云ふ。人間的なる餘りに人間的なる現實の冷光を以て、理想的なる餘りに理想的なる幻影を照破し、酷烈なる偶像破壊の鐵槌を打ち下したるものはこれ也。全篇を通じて、珠玉の如く、七首の如く、火藥の如きニイチエ獨特の警語と箴言とより成る。而してその箴言と警語との、如何に簡潔にして明快なるかを、如何に尖銳にして辛辣なるかを、如何に激越にして暴烈なるかを見よ。

第三編

## 黎明

全一冊

(刊新)

「人間的な餘りに人間的な」に於て理想的な餘りに理想的なものより解放されたる彼は本書に至つて更に人間的な餘りに人間的なものをも、實證論的反動の乾燥と低調とを超越し、藝術家ニイチエ自身への健全なる歸還を表明せり、而して前向きに冷酷と否定を辿りしものは、その否定の道を行き盡くして、漸く熱烈の肯定に向むとす。これは是れ、大なる否定の後の大なる肯定への一轉機也。壯烈なる新生命の曙光也。これ

近代的戀愛描寫の極致と稱せらるる——

# ■ 死の勝利

ダンヌンツイオ作  
生田長江氏譯

縮七 總洋布最上製  
紙數五百廿頁  
定價九十五錢  
小包料八錢

森田草平氏は『死の勝利』は自分にとつて、人が此世に生れて始めて経験する天變地異のやうなものであつたと云へり……。此の書の題材にとれるは、近代人の近代的特色を發揮したる戀愛也。接吻せられたる額の脊にも、自我の冷笑するを禁じ難き戀愛也。渴望と、唾棄と、同情と、敵意と、靈感と、淫縱とを一にしたる病的戀愛の一切也。近代の藝術界に於て最も權威ある傑作たること、亦何人か疑ふものあらんや。

# ■ ツルゲエネフ散文詩

生田春月氏譯  
忽ち定價五十五錢  
再版 郵送料六錢

載するところ何れも十行乃至二三十行の短文なるが、其の一字一句は皆詩の詩、哲學の哲學也。この大作家が一生の體驗を打ち込める無盡蔵の詩味哲味、而して人生味は十度讀んで十様の意味、百度讀んで百様の意味を示すものあらん。今、詩人として且つ翻譯家として知らるゝ生田春月氏が苦心の新譯、公にせられたり。譯の精嚴、よく原文の風神を傳へたるは勿論、別に懇切なる註解、讀者の注意等をも添へたり。

31  
691

終

